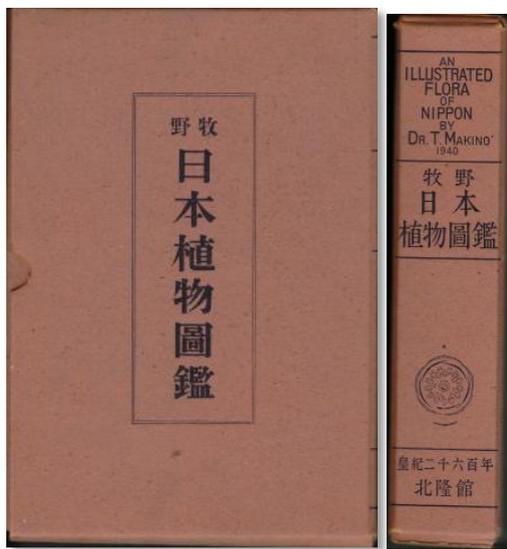


鹿沼の自然・栃木の旅

月報第11号

(2013年3月)



～牧野富太郎生誕150年～

北光クラブ
自然観察クラブ

『牧野日本植物図鑑』北隆館発行

初版（昭和15年10月2日発行）24×15×5cm 本文 1,070 頁

再版（昭和17年8月15日発行）

三版（昭和18年6月15日発行）21×15×5cm 本文 1,070 頁 5,000 部

四版（昭和19年11月25日発行）

五版（昭和23年3月20日発行）21×15×6cm 本文 1,070 頁

初版は柔らかい表紙で箱付。三版は堅い表紙で箱付、少し小さくなる。五版は堅い表紙で箱および外箱付。

紙質は初版が最も良く、版を重ねるごとに悪くなって行く。五版は昭和20年代に出版された本の多くがそうであるように紙質は悪く、同じ頁数なのに厚くなっている。五版までの総発行部数は27,500部ほどと見られる。

『牧野日本植物図鑑』序文より

序

嗚呼、皇紀2600年、時恰も東亜新秩序建設の第4年、會^{たま}ま国難非常^{とき}の秋に際し、小生特に此記念すべき新著の本書を完成し、茲に初めて其公刊を見るに至りしは至幸中の幸と謂うべく、熟^{つらつ}ら既往を追懐すれば則ち轉^{うた}た感慨の切なる者が無んばあらずである。

小生は我が少壯時代より疾^{はや}く既に植物図志の本邦に必要なを痛感し、遂に意を決して明治21年に『日本植物志図篇』を発行し、次で『新撰日本植物図説』並に『大日本植物志』等と逐次に公刊したのであったが、此等は皆不幸、中道にして停刊の悲運に遭遇した、大正14年に『日本植物図鑑』を著わした事もあったが、是れは固より我が意をして満足せしめ得る労作では無く、そは畢竟一時臨機の応急本たるに過ぎ無った、故に早晚之れをして絶版せしむべき機運の到来するのを俟^{まっ}ていたのであるが、遂に今日其待望の好期に際会したのは私

(次ページへ続く)

の最も欣ぶ所である

右明治21年以来、星移り物換って年を閲る事実に数十歳、明治の御代は大正と成り、次で昭和と改元し、此間に於ける長い幾星霜の間、本邦の学問、教育、技術、工芸並に産業の発達は真に目覚ましい者があって、実に今昔の感に堪えないのである、乃ここで小生は此好機会に於て小生の信ずる分類体形に拠る図鑑を著さん事を企図し、爾来春風秋雨十数年、黙々の下新たに幾千の図版を創製し、又併せて之に伴う幾千種の新記載文を準備し、以て発行者の希望に副い、漸く本書第1次の完成を告げたのは実に本年、即ち昭和15年、習々たる春風は桜花をして将ひらに発かしめんとする頃であった

此間學術の進歩は駭々乎として1日の休止も無く、延いて世間本書を要求する声の耳朶を打つことも日一日と増加するを以て、従て著作者としての良心的希望も自然高潮し来らざるを得なく遂に今其完成を見るに至ったと同時に、更に進んで補遺の続刊をも断行する次第と成ったのである

本書に於ては著者独自の見解に基ける学名、並に新たに発表せられた多くの学名を採択し、又従来之無かりし和名の解を付し、又更に漢名の当否を画期的に匡正して記せし事など、其他尚新しい試みが多分に盛られているのは此に改めて其れを吹聴しなくても、是等の諸項は本書を繙く諸賢の直ちに眼底に映ずる印象であらう

本書は絶えず最善を尽して編纂せしと雖ども我が学未熟我が識足らざるが為め、必ずや書中諸所に誤謬多からん事を疑懼する、四方達識の諸賢其点遠慮なく御垂教を賜われれば誠に幸甚の至りで是れ独り著者の為めのみならずと信ずる
(以下略)

昭和15年7月

結網学人 牧野富太郎

繇ようじょう條書屋の南窓下しに識るす



※ 表記は読みやすさを考慮して適宜手を加えました。

(原文はカタカナ表記、旧仮名遣い、旧字体です)

那須黒羽、社寺参詣と巨樹探訪の旅

2月17日(日) 天気・晴れ

立春が過ぎたとはいえ厳しい寒さが続く中、登山や自然観察が好きな常連が薄暗い早朝から集まり、方々に雪の残る県北は那須黒羽に向かいました。

茨城県と境を接する八溝山系深く分け入り、まず古刹雲巖寺を訪ねます。その後、花瓶山(標高692m)目指して狭い林道を途中まで車で進み、さらに徒歩で1時間ほど、雪のない日向の道、解けて凍った恐々の道、雪がしっかり残る道と歩いて、ようやく登山道に。頂上付近はさらさらの雪が十数センチも積り、登りも下りも難路で「冒険クラブ」さながら。しかし小さい子も元気に歩き通しました(子どもってすごい!)

山登りの後は、黒羽城址公園の駐車場に店開き、各自持参の弁当の他、恒例の焼きソーセージや焼き餅入りぜんざいで楽しい昼食タイム。食後、震災の傷跡残る城跡を見ながら芭蕉の館に至り、館内のストーブで暖を取りながら、古文書に見入ったり、一服したり、子どもたちは館内を駆け回ります。

帰途、古民家を利用した「くらしの館」に寄り、古い民具をいじったり、隣接するおみやげセンターで地産品の買い物を楽しんだり。

花瓶山の「兄弟ブナ」のうち「太郎ブナ」は残念ながら枯れて倒れていました。その他、那須神社や温泉神社の巨樹めぐりは今回も次の宿題となりました。

(北光クラブニュースNo.1 2 3掲載)

※ 参加者

佐々木伸二・千洋・真澄・茂・理恵、
小島美穂、山口龍治、
石崎隆史・裕子、
阿部良司・みゆき(計11名)



※ 見られたおもな樹木

ブナ、カラスザンショウ、イヌガヤ、
チドリノキ、シラカシ

※ 写真で振り返るあれこれ



←雪の中の古刹
雲巖寺



山頂付近の「兄弟ブナ」
左の「太郎ブナ」は枯れて倒れている



雪上の休息



頂上直前の急登



←シラカシの巨樹
(黒羽城跡)



黒羽芭蕉の館
城跡の地形を活かした公園の一角

※ 参加者からいただいたおたより

花瓶山に登って

花瓶山は692mと雨巻山より高く、ブナが多く見られた。だが、このような低い山になぜブナがあるのだろうか？ 以前は、もっと高かったはずで風化・浸食を受けて今の高さになった。となりの東北地方から日本列島は北へ伸びて緯度が増していく。その端に位置しているから低い山でもブナが生き残れたように思う。

花瓶山のふもとにカラスザンショウの大木があった。私が見たものでは最大である。誰かが植えたのでは、という人がいたが、食べられないし、きれいな花が咲くわけでもなく、「よほど物好きでない、こんなの植えないだろう」と笑いながら山を後にした。花瓶山は北方系と南方系の植物の接点が近く、自然植物園という感じがした。

《ブナについて》

ブナの北限は、北海道・渡島半島の黒松内町の歌才の森で、南限は鹿児島県鹿屋市の高隈山系です。高さは、北では30mと最大で南では10mそこそこ。盆栽で、これはブナだと言って見せてくれる人がいるが、それはタイワンブナかアメリカブナだった。何度かブナの種子を持ち帰って植えたが、2～3年で枯れてしまう。日本のブナは下界では育ちににくいようです。ブナに限らず高い山の植物は下界では育ちにくい。売られていることがあり、うまく根付いたら、その場所を動かさないことです。

(山口龍治)



←花瓶山山頂近くの
ヤドリギ



センニンソウの綿毛？

武州高尾山ハイキング ～早春の草花、暖地性の樹木、薬王院を訪ねて～

山々には出あいがあった。いつの山にも、どこの山にも。しかし、小学校五年の秋の遠足に、はじめて武州高尾山の頂ぎに立って、すぐ眼の前にそそり立つ富士山を見仰いだときほど、大きなよろこびにひたされたことはない。

(おとうさん)

私は小学校一年の夏に死んだ父の面影を、紫紺の山肌の上に描いて、胸に父を呼び、滂沱として溢れる涙を拭いもやらず、ススキの茂みの中に立ちつくした。

(中略)

父は富士山にいて、私が高尾山の頂ぎまで来て、父にあうのを待っていた。

(おとうさんは山にいる)

その思いを胸において、私は山を歩きつづけていった。

武州高尾山は、秩父山地の西端が、相模川の谷にむかって、幾うねりかの山なみを重ねてなだれ落ちるその一つの頂ぎをつづっている。標高は六百メートル。歩いて登れば二時間である。



田中澄江著『花の百名山』 昭和 55 年 7 月 25 日 文藝春秋

〃 『花の百名山』(愛蔵版)1997 年 6 月 1 日 〃

昨年、雨天中止となった高尾山行を再度計画しました。沢沿いの道、尾根歩きなど変化に富んだコースを選びました。出発が早く、帰りは遅くなることが予想されますが、早春の沢沿いは種類は少ないけれど、最も美しい花が見られる季節です。サクラが咲いてしまうと人出が多くなりますが、小下沢は比較的静かな山歩きが楽しめます。山中各所に茶屋や食事処があり、食事、トイレには事欠きません。ぜひご参加下さい。

日 時：3月31日(日)AM6:10 JR鹿沼駅集合

行 程：鹿沼 6:27——(日光線)——宇都宮——(湘南新宿ライン)——新宿
——(中央線)——高尾ニニ(京王バス)ニニ大下……(40分)
……小下沢キャンプ場……(1時間)……景信山……(30分)
……小仏峠……(20分)……城山……(45分)……高尾山
……(35分、高尾山口まで約1時間半)……ケーブル高尾山駅
……清滝駅……高尾山口——(京王線)——新宿——(埼京線)
——赤羽——(宇都宮線)——宇都宮——(日光線)——鹿沼

服 装：防寒着(セーター、ジャンパー)、帽子、軍手、軽登山靴または運動靴

持ち物：リュックサック、ポット、レジャーシート、雨具、

お手ふき、タオル、ちり紙、筆記用具、レジ袋、

おやつ、お弁当(山上の茶店でも食事ができます)

あると便利なもの:双眼鏡、カメラ、1/25,000地形図は「与瀬」「八王子」

費 用：JR(片道)～2520円(青春18きっぷができれば1日2300円)

京王バス220円・京王線120～370円、食事代

(交通費は青春18きっぷ以外は子どもは約半額になります。)

今年度初めての方は他に保険料800円

問合せ：自然観察クラブ 阿部(090-1884-3774)

月報第9号、5ページ掲載の山口さんの寄稿「雨巻山で見た樹木」について、
第10号に載せた誤字訂正に、さらに誤りがありました。

2行目 (誤) ウラジロガシ→(正) ウラジロガシ
(誤りではありませんでした)

2～3行目 (誤) ツクバネガシ→(正) ツクバネ
筆者からご指摘いただきました。申し訳ありません。

重ね重ねのことでお詫び申し上げます。

(編集部)



植物屋の日記

シナノキ

2月に鹿沼学舎の役員会があり、平成25年度の自然部会としての行事についても討議された。豊田敏盟部会長から、昨年4月、北光クラブも参加して行った見笹橋～下遠部橋の自然観察会は良かったから今年もやってはどうか、との提案があり、今年は鹿沼学舎独自の観察会を計画することになった。豊田氏は特にあの花がお気に入りのようであるが、僕としても黒川に沿って田んぼの植物を見ながら歩いていると、急に山地の植物帯になってくるのがおもしろいと思う。実はあの部分は左側がスギの植林地になっているのを見てもわかるとおり、山が黒川右岸(西堤)までせり出していて、道路と黒川の間には山地の樹木が繁茂している。そして黒川はその部分だけが美しい溪流となっているのだ。

そういえば斎藤日出世氏があのあたりの沢に滝があるよ、と教えてくれたのを思い出し、滝の見学も計画に入れたら内容の濃いハイキングになるなと思って、確認しようと2月24日、見野に出掛けた。見笹橋の上の堰堤に行くとハクチョウが1羽、羽を休めている。嘴の黄色い部分が大きく、前に尖っているのでオオハクチョウ、首の白が灰色がかっているので幼鳥のようだ。北帰行の途中、置いてきぼりになったのだろう。



滝のある沢とは多分、森を抜けて用水路に突き当たる



少し手前にある小さな沢だろうと思って、道端に車を置いて歩いた。沢に降りて、しばらく登って行くと切り立った両岸が狭まってきて、沢は急に右に曲がっている。ああ、あの右に曲がった所にあるのだな、と思って行ってみると、なるほど落差2～3mほどではあるが迫力のある滝である。こんな所に滝を発見するとは、斎藤氏はさすが鹿沼の誇る探検家である。間伐材がはさまっているのでさっそく片付

(次ページへ続く)

けにかかったが一人ではびくともしない。ここはあきらめて、後日、助っ人を頼むことにする。

黒川沿いの雑木帯に昨年気が付かなかった樹木があるかもしれないと思って探索してみた。クリ、シラカシ、アラカシ、エノキ、エゴノキ、ヤマモミジ、アカメガシワ、アブラチャンなどが確認できた。

黒川の流れのほとり、岩場がせまっている所に、見覚えのある樹木があった。樹皮が細く長く裂けている。ははん、シナノキだな、と思って落葉を見てみると基部がくぼんでいないでシラカバの葉の形に近いが、やはりシナノキらしい。シナノキは横根山に多く、地蔵岳でも見たことがある。關本平八著『栃木縣植物總覽』(昭和16年3月13日発行)には二股山の植物一覧が載っていてその中に「シナノキ」が見られるが、二股山では今のところ僕は見ていないし、こんな低い山にシナノキがあるのか、としばらく疑っていたが、上南摩の西之入の入口、南摩川の水辺でサイカチの大きな木とその下のあたりで3本のシナノキが立っているのを見つけた。なんだ、こんな平地にもあるのか、とその時思ったが、山地の植物とはいえ、山地は麓まで続いているのである。



下遠部のシナノキと落ち葉

シナノキの仲間にはボダイジュがある。よくお寺に植えられるというが、僕が初めてこれを見たのは益子の地蔵院に自然観察クラブで出掛けた時だった。冬ではあったが、この仲間は花序(花穂)の柄の基部にへら形の葉のような苞がはり付くように付いているが、それが枯れて枝に残っていたのでわかった。

菩提樹がなぜお寺に植えられるか、といえは釈尊がこの樹下に座して悟りを開いたと伝えられ神聖視されるからである。しかしボダイジュはシナノキ科の中国原産の樹木である。本当の菩提樹はインド・ビルマなどに産するクワ科のインドボダイジュで、イチジクに近い。仏教が東へ北へ伝えられると同時にインドボダイジュも伝えら

(次ページへ続く)

れていったが、途中で寒さに耐えられず、中国で葉の形がそっくりのボダイジュにハト
ンタッチしたのかもしれない。ところで、外来種の和名が日本で広く知られており、後
年日本で見つかった樹木がその外来種に近いからといって、日本産の樹木の和
名に外来種の和名が用いられる、というのは、なんとも納得いかない。

とはいえ、我が国の山地にもともと自生している樹木に、ボダイジュという素敵な名
前がつけられた、というのは何ともうれしい。オオバボダイジュがそれである。

会津西街道、横川の先の駐車場に車を置いて旧道に入り、山道を山王峠まで
登ったことがあった。山王トンネルの福島県側に降り、街道を戻る途中、ハート型の
葉の樹木を見つけた。オオバボダイジュかもしれない、と思って葉を持ち帰って調べ
たが、多分間違いないと思う。県境の稜線上にあったタムシバ(コブシに近い)もそ
うだが、このオオバボダイジュも北日本、あるいは日本海側の植物であるらしい。シ
ナノキとオオバボダイジュの間には雑種(ノジリボダイジュ)ができるというから、種類は
近いのだと思う。

入粟野から直接横根山の前日光牧場に登るハイランド線ができる前、この計画
を知った大久保覚太郎氏は横根山の植物を調査し、直径1mほどのシナノキの巨
樹を発見された。森と水のネットワークの森道暁氏の協力も得て、当局と話し合い
をし、ハイランド線予定地の沿線にあるこの巨樹を切らない、という約束を得た。

3年程前、自然観察クラブで巨樹探訪の会を計画し、大久保氏も招いてハイラ
ンド線を登った。横根山の地理には精通している大久保氏であったが、道路のすぐ
そばにあるはずのシナノキの巨樹は見つからなかった。

(阿部良司)



ボダイジュ

北隆館『原色樹木検索図鑑』より

Der Lindenbaum 菩提樹

シューベルトの歌曲集「冬の旅」より

門の前の泉のそばに

一本の菩提樹が茂っていた。

私は、その木蔭で、いくたびも

さまざまな快い夢見に耽ったものだった。

そしてまた、その菩提樹に、私は

数々の愛の言葉を彫り刻んだ

喜びにつけ、悲しみにつけ、私は

絶えずこの樹に惹かれつづけたものだった。



今日という日もまた、

私は、さすらいの旅をつづけねばならぬ。

この深い夜の闇をとおって。

真暗な闇の中で、なおも私は

しっかりと眼を閉じていると、

菩提樹の枝が風にざわめく、

あたかも私によびかけるかのように――

「ここにおいで、私の傍に、友よ、ここでお前のやすらぎを見出すことができるのだ」と。

冷たい風が真向うから

さっと私の顔に吹きつけた。

私の帽子は頭から飛び去った。

だが私は、後を振り向こうともしなかった。

もう長いこと、私は

あの場所から遠ざかっている。

それなのに私には、絶えずあの樹のざわめきがきこえてくるのだ、

「ここにこそ、お前のやすらぎがあるのに……」と！

(原詩：ヴィルヘルム・ミュラー／訳：高崎保男)

自然観察クラブ 2013年度 行事予定

4月	鹿沼	石裂山	登山（岩場）
5月	塩原	新湯富士とヨシ沼、大沼	登山・ハイキング
6月	東京	明治神宮	遠足
7月	日光	太郎山	登山
7月28日（午前）		水の生き物観察会	魚取
		（午後）魚釣り教室（流し釣り）	魚釣
8月4日		雑木林の昆虫観察	虫取
9月	那須	茶臼岳（ロープウェイ利用）	登山
10月	日光	戦場ヶ原（湯本——湯滝——泉門池——赤沼）	ハイキング
11月	茂木	仏頂山（笠間・楞嚴寺～仏頂山）（益子からSLに乗って）	遠足・登山
12月	田沼	大鳥屋山	登山
1月	真岡	井頭公園（野鳥観察）と益子、西明寺・地藏院	遠足
2月	栃木	太平山より佐野・岩船山へ	登山
3月	つくば	筑波山	登山

2012年度 収支報告

次の皆様より、年会費をいただきました。（敬称略）

桜井節子、福田節子、福聚典子、森 道暁、大貫とし子、山口龍治、小島美穂

また、森 道暁、大貫とし子両氏からカンパをいただきました。

2013年度年会費を次の皆様よりいただきました。

桜井節子、大貫とし子、山口龍治

会報の購読について

会報はインターネットでご覧になれます。

また印刷したものはクリーニングハウスあべ店頭に置いてあります。(無料)

会報の郵送は3月号をもって終了させていただきます。

引き続き郵送をご希望の方は、年会費(1,200円)の納入をお願いいたします。

なお、4月号よりインターネットで見られる会報は印刷版から一部内容を削除します。(個人情報の保護、自然保護の観点から)



鹿沼の自然・栃木の旅 月報第11号

2013年3月20日発行(修正版)

北光・自然観察クラブ

鹿沼市上田町1923

発行人 阿部 良司

年会費 1200円

ホームページでもご覧になれます→

クリーニングハウスあべ



検索